836
209
3

萎草年録

不懲迷語並外録

百二十

国立国会図書館　タイトル『不懲迷語並外録』　請求記号 836-3

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『不懲迷語並外録』　請求記号 836-3

ガラス使用

不懲迷語外篇巻二

目録

二三 民部省規則 以下太政日誌抄録
二四 按察使委任状
二五 弾正臺弾例書
二六 分雅美地為北海道十一国布告
二七 桑名松山岩手家名可処置達
二八 瑞西合衆国書翰
二九 蛇地開拓類書
三十 雇員造幣寮置下問
三一 日誌雑鈔 自八十二七月十四日 至二百十 十二月十二日
三二 仙臺三好監物割腹始末届書 日志百八所出
三三 天童土田大八割腹始末届書 日志百十一号
三四 日誌抄 常備兵 大学 江藤中郷遭害 京兵ア省廣
三五 兵部卿宮辞表
三六 京都伏水十津川陸軍將在勤 大坂全上
三七 故大村兵ア大帰狼藉人處刑差留候付在京諸官乞問
三八 吉井藩知事従四位上表
三九 北條従五位辞藩知事表
四十 浅野従五位辞爵位表 附浅野正二位上表

大正 9. 5. 27 購求

国立国会図書館　タイトル『不懲迷語並外録』 請求記号 836-3
ガラス使用

四一 一橋田安吉井狹山藩免知事賜家祿御沙汰

四二 全上藩士卒御処置

四三 清水家名立

四四 増上寺書籍献金褒詞

四五 諸官省府藩縣御用途補益心得布告

太政官日誌明治二年第八十四號 七月廿七日

東京城第四十七

○七月二十七日 乙未

三 民部省規則

一 民政ハ治國ノ大本最モ至重ノ事トス謹而御批言文ニ其士モ至仁ノ 御趣意ヲ夫ヲ體シ府藩縣ト戮カ協心教化ヲ廣クシ風俗ヲ敦クシ生業ヲ奬勸シ撫育ノ術ヲ尽ヽシ賑濟ノ備ヲ設ケ上下ノ情ヲ貫通シ以テ衆庶シシテ可令安堵事

一 在職ノ面々懇切ニ相輔助勉励シ長官ノ指揮違背ス可ラスト官等ノ高下ヲ論セズ所存ノ事件ハ無忌憚公正商議スベシ其下ニ號令スル必ズ始ヲ愼ミ聊カ民ニ信ヲ失ハザルヲ緊要トス故ニ永世ノ規則ヲ創立シ或ハ從前ノ法制ヲ改正スルハ審ニ風土民情ヲ察シ篤ク利害得失ヲ考ヘ其地方ノ衆議ヲ尽ヽシ御発令ニ可相成事ト雖モ民心ニ関係スヘキ儀ハ無伏藏可言上事

国立国会図書館　タイトル『不懲迷語並外録』 請求記号 836-3

ガラス使用

一 賞罰ヲ明ニシ勸懲ノ道ヲ立ルハ地方官ノ要務タリト雖モ其伺ヒ出ル所ハ宜シク事實ヲ詳ニシ煩濫ナカラシムベキ事

一 節義篤行最モ衆庶ノ模範ト成ベル者ハ本省ニ於テ之ヲ賞シ其事蹟ヲ旌表ス可キ事

一 郡国ノ地図戸口名籍ヲ詳明ニシ兼テ租税ノ多寡ヲ知ルベキ事

一 府藩縣ニ於テ断シ難キ訟ハ審ニ其事實ヲ糺シ能ク其情状ヲ吐露セシメ毫モ壅蔽冤枉ナキ様公平ニ裁断ス可キ事

一 堤防橋梁道路等土木ノ事台心ル可ラズ府藩縣管轄地所修繕儀伺出候ハヽ可否詮議ノ上府藩縣ニ委任施行ス可シ堀割分水等新ニ水利ヲ興シ又ハ利根信濃天龍等ノ大河管轄交互スル治河等ハ時宜ニ因リ役員ヲ遣シ其地方官ト戮力施行ス可キ事

一 驛逓人馬ノ制度任員銭増減等総テ其驛村ノ貧富戸口ノ多寡等ヲ熟知シ當時ノ米價ヲ比較シテ公平ニ相定ムベシ府藩縣ニ指揮スルハ本省ノ任ニシテ施行スルハ府藩縣ノ職務タリ総テ下民ノ疾苦ヲ厭ヒ旅人ノ通行ヲ便ナラシムベキ事

一 田畑ヲ培養シ山野河海ノ利ヲ興シ種樹牧牛馬等総テ生産ヲ繁殖シ以テ富國ノ道ヲ開成スベキ事

一 重大ノ事件ハ本省次議ノ上更ニ 天裁ヲ仰ク可シ其餘御委任ノ事

一 奏聞ヲ経テ可施行事件ハ太政官ノ布告ヲ請フ可シ其他ハ本省ニ於テ布令ス可キ事

一 太政官ヘ伺出等ハ卿輔ノ專務トス病氣或ハ不参等ノ節ハ丞ノ取計格別タルベキ事

一 丞ハ省事ヲ糺判スル定例ノ外重事件ハ次ヲ卿輔ニ取ル可シ正ハ司中委任スル定例ノ外重事件ハ次ヲ丞以上ニ取ルヘシ尤定例中ノ事ト雖モ重大ノ事件ハ卿輔ニ逆ス可シ且正病氣不参ノ節ハ司ノ庶務次ヲ本省ノ丞ニ取ル可キ事

一 第十字参仕第十二字迄前日調ベ置ノ事務ヲ次断シ第十二字ヨリ第二字退出ニ至ル迄当日ノ事務ヲ取調ベ置ベシ當省ハ諸府藩縣ノ民政ヲ総判シ遠路往復ノ事ニ付必凝滞ナキヲ要ス尤至重ノ事件ハ時日定限ニ非ザル事

国立国会図書館　タイトル『不懲迷語並外録』 請求記号 836-3
ガラス使用

一 諸有司音物贈答最モ嚴禁トス毫モ依怙偏頗ノ處置有ルベカラズ且府藩縣ヘ出張ノ節総テ尊大ノ弊ヲ除キ軽装ヲ主トシ寫料賃銭等拂ヒ遣シ下民ノ疾苦トナラサル様致スベシ御用筋ニ依リ道案内一両人ハ格別所役人ニ送迎セシメ權威ヲ振ヒ或ハ賄賂ヲ受ル等ノ事一切嚴禁タルベシ陪從ニ至ル迄嚴密ニ心ヲ著ク可キ事

一 同僚中如何敷所業見聞ノ節ハ相互ニ忠告シ其キニ及ヒテハ長官ヘ可訴出事

右之條々可相守者也

縣官人員并常備金規則

一 官員

知事縣 一人　参事 一人

但大少ノ官階ハ人材ニ從テ之ヲ定ム

大属内三人權 四人　少属内二人權 四人　史生 三人　捕亡 五人　総十八人

右十一万石高目安

一 官員ヲ定ムル高五万石迄ハ一万石ニ付二人トス六万石余ヨリ十万石ニ至ル迄ハ更ニ万石ニ付一人五分加入ス乃チ高十万石十レハ五万石官員十人ヘ合シ総計十八人トス十一万以上二十万石迄ハ更ニ万石ニ付一人ヲ加入ス前ノ十八人ニ合シテ二十八員トス惣シテ官員ノ増減ハ前文目安ニ依テ属捕亡ヲ以テ相當コレヲ定ムヘシ

縣掌 二人　使部 二人

一 縣掌使部ハ石ノ多寡ニ不拘定員ノ通タルベシ尤モ出張所アレハ格別ニ置ク不苦候事

一 総官員中十万石迄ハ参事一人タルベシ十一万石余二十万石迄ハ大参事一人少参事一人ヲ置クベシ二十一万石余三十万石迄ハ大参事一人少参事二人ヲ置クベシ三十一万石余ハ大参事二人少参事二人ヲ置クベシ尤モ開港所管轄ハ石ノ多寡ニ不拘参事一人ヲ加入シ外國ノ事務ヲ專勤スベシ其他開港事件ニ関係スル官員ハ別ニ加入スヘキ事

一 常備金　金六百両　一万石ニ付金百二十両宛　金二千両　一万石ニ付金四百両宛

終ニ千六百両　右五万石高目安

一 縣舍ノ諸費其他諸官員巡按ノ入費并縣掌以下ノ月給等遣拂ハ高五万石迄ハ一万石ニ付金百二十両乃千六百両トス六万石以上十万石迄ハ万石ニ付百両ツヽ十一万石以上ハ万石ニ付五十両二十万石ナレバ前ニ合シテ千六百両トス惣シテ目安ヲ以テ照準スベキ事

一 縣中年々常費五万石迄ハ一万石ニ付金四百両乃千二千両トス六万石ヨリ十万石迄ハ万石ニ付二百両十一万石ヨリ二十一万石迄ハ万石ニ付百五十両前ニ合シテ四千五百両トス惣シテ目安ニ依リ兼テ縣舍ニ備置キ其事ノ繁忙ニ從テ取計濟ノ上明細書ヲ以テ可相達但シ制外ノ事件ハ其時々民ア大藏需ヘ可相出事

一 縣舍官員居宅并窄屋創立等臨時費用ハ常備之例ニ非ス三分之一ヲ官給シ自餘ハ管轄ノ石高ニ分課スヘシ尤官員之居宅取繕等ハ可為自費事

二四 ○九月二日 九十五号 右大臣ヨリ委任状寫

按察使

民政ハ治國ノ大本至重之事トス 御一新以来專ラ億兆其所ヲ得テ生業勉勵候様トノ 御趣意之処三陸盤城両羽等之地ニ至テハ去年兵革打續平定ノ今日ニ當リ萬民猶未タ安堵セス 御仁恤ノ 御趣意毋貫徹ニ至ラス實ニ太政之隆替ニ關係候間今般按察使トシテ被遣候付而ハ藩縣ノ政績ヲ熟察シ地方官ト戮力協心專ラ 御趣意ヲ奉體シ政教治化其道ヲ尽シ上下之情ヲ貫通セシム可ク候事

右大臣

○八日 二五 弾例書寫

一 親王及諸司ノ奏任非職ノ五位以上ノ犯解官 親王ハ徒罪 以上及判任以下庶人ノ父母ヲ歐ナ判逆ニ連累スルモノハ奏弾ス自餘ハ直ニ刑部省ニ糺移ス

一 判任以下ノ解官以上ハ臺ニ於テ糺弾シ自餘ノ犯ハ本司及府藩縣ノ司ヲ召シ

国立国会図書館　タイトル『不懲迷語並外録』 請求記号 836-3
ガラス使用

テ糺弾ス又市井庶人ノ非違ヲ巡察視ル所ノ者ニシテ是ヲ府官ニ移シテ糺サレム若ハ縣
司之　但本司及ヒ府縣ノ司ハ判官以上ヲ召ス可シ
一應須糺劾シテ犯罪未タ其實ヲ審ニセス擬状ヲ勘向スヘキハ刑部省ニ移シテ推向セ
シメ事由ヲ知テ事大　解官以上ナラハ奏弾ス又罪条既ニ明著ニシテ勘向ニ及ハス或
ハ告密ニ拠リ事急卒ニ出ルモノ等ハ直ニ刑部省ニ告テ捕縛セシメ推拷セシムルノ時解官以上ノ
ヲ得テ事大ナラハ奏弾ス其直ニ省ニ告テ捕縛セシメ推拷セシムルノ時解官以上ノ
罪ハ大忠以下一人有ニ臨テ是ヲ聴ノ又臺ヨリ糺スルノ罪ニアラスト雖モ忠以
ハ大忠以下臨臨スルヿ既ニ布令アルカ如シ若究在ノ勿タルアラハ次ヲ俟メテ
一刑部省死因ヲ決セハ断案ヲ臺ニ移ス可シ若シ仍テ糺弾ス可キ者ハ糺弾
奏聞ス又死罪既ニ奏報ストイヘトモ猶究在ヲ許シテ事可疑アラハ推覆シテ以
状奏聞ス可シ

一犯罪発覚スル所ノ論セス枉罪以下トイヘトモ科断ハ一々刑部省ニ附スヘシ
一親王大臣以上官人及ヒ華族ヨリ庶人ニ至ル迫事馬兵杖衣服従者ノ數法則ニ違華麗僭
者ハ過ニモノハ糺弾ス告ノ禮法ヲ越ルモノヲ又同
一官司在判アレハ所由ヲ追テ糺正ス又官人本司ニ於テ政ヲ行フニ怠慢シテ欠有ラハ是ヲ
糺劾ス
一納表遣官人ノ害政及ヒ郡司ヲ告ル書ハ辨官若大臣ニ上リ　不可
按察ヒ理當ル奏聞シ事大ナルヲ　論セス　不當理ハ之ヲ弾シテ刑部ニ移ス　後臺ニ受テ其所訴ヲ
一京中ノ巡察ハ毎町坊令一人ヲ従ヘテ巡視スヘシ若急忩ニ捕縛スヘキモノアラハ巡邏ノ兵
シルシテ縛セシメ先勘問ヒテ所司ニ移ス
一巡察弾正時々京中便地ヲ點シ坊令ヲ従ヘテ戸主ヲ會集セシメ巡察是ニ臨ニテ京府
官人及坊令等百姓ヲ枉害セルカ時勢其宜キヲ得サルカ孝順義節ノ顯ハレサルモノ有カ

如何ヲ尋ヌ可シ藩縣同之

一 巡察時々囚獄ヲ検校シ獄司ノ非違ヲ糺弾ス

一 人罪ヲ告ルモノアラハ宜ク三審ノ法ヲ用ユヘシ告密モ又令文ニ據ル

一 奏弾ハ大政官ヲ歴スシテ直ニ奏聞スト雖モ時宜ヲ計リ君若クハ弼右大臣トモニ奏ス可シ

尹弼アラサレハ大忠大右臣ニ就テ奏ス但シ右大臣ノ外職事預聞事ヲ得ス

一 親王及参議以上ノ罪ヲ糺劾ス可シハ時宜ニ從テ制ヲ立ツヘシ其朝堂ノ非違ハ式ノ例ニ准ス

但参議以上ハ尹弼アルニアラサレハ弾スルヲ得ス

一 四位以下ノ糺弾ハ悉ク臺ニ召ス

一 参議以上身病アレハ家令ヲ召シテ勘問ス家令本主ニ告テ猶不肯答ハ忠以下其家ニ向テ

對弾ス四位以下病アレハ其愈ルヲ俟テ臺ニ召ス

但急卒ノ事アレハ此例ヲ用ヒス

一 臺喚三度ニシテ参セス并ニ勘事ヲ辨申セサルモノハ罪ニ處スヘシ

一 非常巡察ヲ藩縣ニ發シ政事ヲ覆問シ非違ヲ糺弾ス可シハ詔使ノ例ニ准スヘシ

一 叛逆告密アルニアラサル以外ハ内奏スルヿアルヘカラス

但勅問ニ出ルモノハ此限ニアラス

一 弾正私ヲ挾テ事實ナラサルモノヲ弾セハ反坐ノ法ニ准スヘシ

一 尹若シ犯スヿアラハ弼以下忠以上共ニ議判シテ奏弾ス其臺中ノ官人非違アラハ各相

弾ス

一 朝議法律ニ關ルモノハ弾正悉ク預知ルヘシ儀式衣冠等ノ制度モ又同シ

右依　天裁次定如件

明治二年八月

弾正臺

太政官日誌明治二年第八十八號 八月十四日

東京城第五十一

○八月十五日 甲寅

(二六)御布告書寫 ○布告錄ニ寫

北海道 十一ヶ國

渡嶋國

亀田郡部 上磯 福嶋 野津館 松山 爾志

メ七郡

西部後志國

○久遠 ○奥尻 ○太櫓 ○瀬棚 ○島牧 ○寿都 ○歌棄 ○磯屋 ○岩内 ○古宇

積丹 ○美國 ○古平 ○余市 ○高嶋 ○小樽

国立国会図書館　タイトル『不懲迷語並外録』　請求記号 836-3

ガラス使用

メ十七郡

石狩國

○石狩 ○札縄 ○夕張 ○樺戸 ○空知 ○雨龍 上川 厚田 ○濱益

メ九郡

天塩國

○増毛 ○留萌 ○苫前 ○天塩 中川 上川 大津

メ六郡

北見國

○宗谷 ○利尾 礼文 ○枝幸 ○紋別 ○常呂 ○網走 ○斜里

メ八郡

東部 膽振國

○山越 ○虻田 ○有珠 ○室蘭 ○幌別 ○白老 ○勇拂 ○千歳

メ八郡

日高國

○沙流 ○新冠 ○静内 三石 ○浦河 ○様似 縄泉

メ七郡

十勝國

○廣尾 ○當縁 ○大津 ○下川 ○河東 ○河西 ○十勝

メ七郡

釧路國

○白糠 ○尾寄 ○釧路 善報 ○阿寒 網走 ○川上 ○厚岸

メ八郡

根室國

花咲　根室　野付○標津○目梨

メ五郡

千嶋國

国後○擇捉　振別　紗那　蘂取

メ五郡

二七　御達書寫

松平　越中

戊辰正月伏水暴挙　王師ニ抗シ事敗レテ東國ニ遁レ慶喜恭順スルニ及ンテ尚悔悟セス北越ニ至テ再ヒ官軍ヲ拒ミ遂ニ脱艦賊ト共ニ蝦地ニ渡リ賊勢日ニ蹙ルニ及ンテ始テ悔悟ノ志ヲ抱キ賊中ヲ脱シテ横濱ニ来リ自訴伏罪候條天下之大典ニ於テ其罪難被差置此度嚴刑可被處之処出格之寛典ヲ以テ一死一等ヲ減シ津藩知事ヘ永預被　仰付候事

松平萬之助

越中儀大逆ヲ犯シ候ヲ以津藩知事ヘ永預被　仰付候其方ハ夙ク順逆ヲ辨シ先鋒督之軍門ニ帰順シ引續上下謹慎無貳ヲ表シ候ニ付出格至仁之　思食ヲ以今度家名被立華族之列ニ被置更ニ粲ク名藩六萬石支配被　仰付候事

津藩知事藤堂高猷

松平越中儀其藩ヘ永預被　仰付候間名護屋藩ヨリ請取謹慎為致可置候事

名護屋ヘ徳川徳成

松平越中儀今般津藩知事ヘ永預被　仰付候間同人ヘ引渡可申候事

松平萬之助

越中助逆之謀臣取調可申出事

板倉伊賀

同　萬之進

戊辰正月伏水之暴擧敗衂之砌東國ニ遁走ス慶喜恭順スト雖尚悔悟セス日光山ニ伏區後北道之軍門ニ降リ宇都宮ニ謹慎候処紛擾之砌再ヒ脱シテ會津ニ往キ遂ニ松嶋ヨリ賊艦ニ乗リ蝦地ニ渡リ賊勢日ニ蹙ルニ及ンテ始テ悔悟ノ志ヲ抱キ賊中ヲ脱シ東京ニ来リ遂ニ伏罪候條天下之大典ニ於テ其罪難被差置屹度嚴刑可被處之處出格之寛典ヲ以テ死一等ヲ減シ安中藩知事ヘ永預被　仰付候事

安中藩知事　板倉勝殷

板倉伊賀父子大逆ヲ犯シ候ニ永預被　仰付候処於家来共ハ順逆ヲ辨シ帰降之毎員ヲ表シ引續謹慎無貳候ニ付出格至仁之　思召ヲ以今度血脉之者ヘ家名被立下華族之列ニ被置更ニ松山藩ニ萬石之配被　仰付候事　元五万石

同上

板倉父子儀更ニ其藩ヘ永預被　仰付候間謹慎為致可置事

宇都宮藩知事戸田忠友

板倉萬之進儀今般安中藩知事ヘ永預被　仰付候間同人ヘ引渡一事候事

交代寄合　旧若年寄並陸軍奉行　三千石

竹中丹後

戊辰正月伏水暴擧之砌兵ヲ督シテ　王師ニ抗衝シ事敗テ東國ニ遁走ス慶喜恭順スルニ及ヒ尚悔悟セズ去テ會津ニ往キ處々横行仙臺ニ至リ賊艦ニ乗リ蝦地ニ渡リ賊勢日ニ蹙ルニ及ヒ賊巣ヲ脱出テ東京ニ来リ遂ニ伏罪候條天下之大典ニ於テ其罪難被差置

屹度嚴刑可被處之所出格之寛典ヲ以テ一死一等ヲ減シ黒田從四位ヘ永預被　仰付候事

竹中圖書

丹後儀大逆ヲ犯シ候ヲ以今度福岡藩知事ヘ永預被　仰付出格至仁之思召ヲ以家名被立下更ニ其方ヘ三百石下賜候事

但是迄被下置候五百石被召上候事

福岡藩知事黒田長知

竹中丹後儀其藩ヘ永預被　仰付候間大垣藩ヨリ請取謹慎為致可置候事

大垣藩知事戸田氏共

竹中丹後儀今般福岡藩知事ヘ永預被　仰付候間同人ヘ引渡可申候事

笠松縣

竹中丹後知行所自今ヲ其縣支配ニ被　仰付候間大垣藩ヨリ請取可申候事

竹中丹後家来其縣支配ニ被　仰付候間其旨相達候事

同上

各通　待詔院下局云々ノコト　集議日誌第一ヘ在

待詔院

集議院

追録

六　瑞西合衆國書翰寫

横濱千八百六十九年九月十六日瑞西岡士セヲラー館

合衆國評議官ヨリ　御門陛下第一等執政閣下ヘ宛テシ書翰之寫ヲ送ル

瑞西合衆國岡士セヲラールニ代リテ

書記官

ヱ　モッテレ

国立国会図書館　タイトル『不懲迷語並外録』　請求記号 836-3
ガラス使用

東京
外務省へ

寫

ベルン千八百六十九年五月三十一日

閣下明治二年二月十四日附之書翰落手昨年十二月二十八日京都ニ於テ一條左大臣息女立后之禮式首尾能済ミシ旨　天皇陛下ノ命ニテ閣下ヨリ我等ニ報知イタサル、旨承知セリ右書簡ノ為多謝ス且　天皇皇后共ニ幸福長壽并日本國ノ繁榮ヲ祈願シ右ノ祝辞ヲ　天皇陛下ニ仰上ラレンコトヲ我ホ閣下ニ願フ

合衆議政ニ代リテ
合衆國大領
ウェルテイチ記
合衆國執政
スミース手記

堀地開拓

(二九)七月十三日稜御沙汰書　日誌八十二

開拓督務被　仰付置候処今度御改正ニ付開拓使長官ト被　仰付更ニ　宣下賜候事

諸省卿同等タルヘク旨被　仰出候事

鍋嶋従二位
開拓使長官

○仝廿二日仝八十三号　御布告堀基地開拓之儀先般　御下問モ有之候通ニ付今後諸藩士族及庶民ニ云

○二十三日御沙汰書

鍋島開拓使長官

長次両官交代石猗(カリ)表出張被　仰付候事

右同文

清水谷開拓使次官

○八月十一日辞仝八十七号

水戸藩知事徳川韶武

今般堀基地開拓之儀御布令ニ付其方儀ニ祖父齊昭朝臣之遺志ヲ継キ自ラ彼地ニ跋渉シ開拓之方ヲ相竭シ度上日諸藩ニ先チ願出候段深ク御満足ニ被　思食候速ニ人民ヲ移徙シ開拓取様可申候尤地所之儀ハ開拓使ヨリ割渡可申候事

兵制

[illegible]任　任從四位　目録五百両

島　從五位　肥前藩　右エ門

去々午大総督着陣間ナク鎮将府被置候以来引續キ東京府ニ在職日夜勉励多端之御用相辨ヘ今般更ニ北海道開拓判官ニ選任被　仰付候処日常ナラサル事務鋭意遵奉且數百里不毛之寒地ニ跋リ聊不憚艱難鞠躬尽力可致之心底ニ神妙之至ニ被　思食出格之訳ヲ以テ叙位并ニ目禄之通被下置候事

○七月二十日丑御沙汰書　仝八十二

鹿兒島藩知事

軍艦献上願出候趣神妙之至　御満足被　思食候然ル処海軍之御規則御取調中々付追而何分之　御沙汰可有之候事

○六一日庚寅　仝

大村兵部大輔

兵學校取建并器械製造御用取調上京被　仰付候事

○八月十七日御達書　仝九十一号

水戸藩知事徳川韶武

天塩國之内　苫前郡　天塩郡　大津郡

北見國之内　麟利尻郡

右五郡其藩支配ニ被　仰付候事

一問

一關藩知事田村崇顕

膽振國之内　白老郡　右郡其藩ニ

佐加見藩知事鍋島直大

釧路國之内　厚岸郡　釧路郡　川上郡　右三郡仝文

○十九日御沙汰書

徳　嶋　藩

日高國之内　新冠郡　右一郡仝文

○二十日御達書

高　知　藩

石狩國之内　夕張郡　膽振國之内　勇拂郡　千歳　右三郡仝文

国立国会図書館　タイトル『不懲迷語並外録』　請求記号 836-3　ガラス使用

兵部省

石狩國之内　石狩郡　後志國之内高島郡　小樽郡　右三郡其省支配ニ被仰付事

○九月二日御沙汰書　第六十五号

兵部省

元會津降伏人格別之寛典ヲ以北海ロ一移住被仰付候事

○五日御達書

全

石狩國之内濱益郡。忍路コツ。ツイシカリ。札幌郡

後志國之内忍路郡。余市郡。美國郡。古平郡　右其省支配ニ云

○十四日御沙汰書

全

後志國ノ内太樽郡　瀬棚郡　瞻振國内山越郡　釧路國ノ内白糠郡　足寄郡

阿寒郡　右六郡全文

○八月廿三日御沙汰　九十二号

伊達建千代麿

北海道開拓之儀ハ方今之急務追々御處置モ有之候処於其藩ハ彼地之風土熟知之者モ不共趣相聞候ニ付士族ヲ始メ農工商ニ至ル迄開拓志願之者相募リ自費ヲ以テ漸次移住為致候様精々尽力可致旨　御沙汰候事

但移住人員并開拓之目的相立申出候ハヽ地所割渡可申事

伊達藤五郎

北海道開拓之儀ハ方今之急務ニ付追々御處分モ有之候得共重大之事柄全地一時ニ御手ヲ可被為着目的モ難相立折柄其方儀不憚艱難自分彼地ヲ跋渉シ開拓致度志願之趣神妙之至ニ被思食北海道開拓御用被仰付候条家来其外有志之徒相募リ自費ヲ以漸次移住屹度實効相立候様尽力可致旨　御沙汰候事

但地所之儀ハ追而　御沙汰可有之事

開拓使

仙臺藩伊達藤五郎侯家来引連北海道轉住自費ヲ以テ開拓致度志願之趣
達 上聞御用被 仰付候間土地割渡可致事
但本藩減禄之末無據自費ヲ以テ轉住其情實可憐事ニ付相ニ心之地所可相
渡且詮議之上可申出事

○八月廿五日 御沙汰書 伊達藤五郎

膽振國之内 有珠郡 渡候様被 仰付候間同縣ヨリ受取可申事

○九月十二日 各通 片倉小十郎 石川源太

北海道云々 伊達藤五郎全文 但書ノ如キ

膽振國之内室蘭郡 右一郡其方支配ニ被 仰付候事 石川源太

膽振國之内幌別郡 右全文 片倉小十郎

○八月廿五日 九十二号 東久世開拓長官

北海道開拓ハ 皇威隆替之所係方今至重之急務ニ候今般彼地ヘ出張數百里外殊方之
寒疆ニ其事務ヲ管督候事不容易艱難一入苦労ニ被 思食候就テハ向後土地墾人民
蕃殖北門之鎖鑰巖ニ樹立シ 皇威御更張之基ト可相成様勉励尽力可有之旨
御沙汰事

○八月二十八日 開拓使

今般本願寺東門主ヨリ北海道新道切立之儀且有志之僧徒新開村落ヘ移住人民教
諭為致度段願之通被差許萬事其府ヘ可伺出旨申渡候間此段相達候事
但北海道土地支配被 仰付候諸藩々ヘ為心得其府ヨリ可相達事

北見國之内宗谷郡利尻郡枝幸郡 右三郡其藩支配ニ被 仰付候事 金澤藩

十勝國之内當縁郡廣尾郡川西郡日高國之内様似郡浦河郡 鹿兒島藩
右五郡

十勝國之内十勝郡中川郡大津河東郡上河郡 右四郡同文 静岡藩

北見國之内斜里郡網走郡 右二郡同文 名古屋藩

北見國之内紋別郡 右一郡仝文 和歌山藩

○北見國之内常呂郡釧路國之内網尾郡 右二郡仝 ○廣嶋藩

後志國之内久遠郡奥尾郡 右二郡 福岡藩

石狩國之内樺戸郡雨龍郡天塩國之内増尾郡留萌郡右仝 山口藩

○根室國之内日梨郡標津郡 右二郡 ○熊本藩

右之藩々各通御達書寫 各通 右九藩

北海道開拓之儀ハ兼而被仰出候通即今之急務ニ而追々御手ヲ被為著候処何分全国之力ヲ用ヒズンハ成功無覚束依之今般別紙地所其藩ヘ支配開拓被仰付候間拮据経営實効相立候様可致事

宗谷郡ハ金沢藩支配ナリ其ハ誤アラシ

今般支配被仰付候三郡之内宗谷郡之儀ハ御用之地所モ有之候ニ付開拓使ヘ可伺出事 山口藩

○二十九日 開拓使

咸臨丸昇平丸自今其府所管ニ被仰付候間大蔵省ヨリ請取可申事 東東願寺光勝

○九月三日 仝九十七号

今般北海道新道切立願之通被仰付候付開拓使之指揮ヲ受ケ可致尺力旨御沙汰候事 増上寺

日高國之内静内郡 右其寺支配被仰付候事 開拓使北海 出張之面々ヘ

今般北海道出張不容易艱難大儀之事ニ候其成否皇室之汚隆ニ関係候間各同心戮力シテ勉励従事可奏其功上日 御沙汰候事

○九月五日

膽振國之内虻田郡　右其藩支配ニ被　仰付候事

庄内藩

○十四日 乃十六号

後志國磯屋郡内後別川東　但川属之　右其方支配ニ被　仰付候事

五島銑之丞

後志國磯屋郡内後別川西　但川西ノツト　ラツラ　右其藩支配ニ被　仰付候事

米澤藩

○九月十五日 九十九号

膽振國虻田郡有珠郡日高國浦河郡夫々支配ニ被　仰付置候得共各地所有之牧場之

開拓使

○十七日

千島國擇捉島内擇捉郡　右其藩支配ニ被　仰付候事

彦根藩

○九月十九日 百一号

後志國島牧郡之内湏築　右其藩ニ

弘前藩

○八二十七日 九十九号

松前ニ於テ是迄西蝦夷地船運上取立候処被廢自今箱館繰

泉壹所都手宮之四ヶ所ニ於テ軍艦ヲ除之外運上御取建相成候ニ付此旨相

達候事

十月九日 全百四号

千島國之内　紗那郡

仙臺藩

右其藩支配ニ被　仰付候事

谷通

伊達英橘

伊達勝三郎

右狩國札幌郡空知郡之内　但地所之儀ハ石狩府ニテ可及差図事

右其方支配ニ被　仰付候事

開拓

十一月十四日 仝第百七号

仙臺藩 亘理元大郎

石狩國之内 札幌郡 空知郡

右両郡之内其方支配被 仰付候間地所之儀ハ石狩府ヨリ受取可申事

仝廿四日

彦根藩

日高國之内 沙流郡 會所元ヨリ東新冠郡境アツヘツ河中迄

右支配被 仰付候條擇捉郡開拓之儀モ猶尽力可致事

日高國之内 沙流郡 會所元ヨリ西勇拂郡境フイハフ迄

但會所元相属候事

同上

十二月二日 仝第百九号

鳥取藩

後志國島牧郡之内 會所元ヨリ南之方シツキ境迄 但會所相属

右其藩支配被 仰付候事

仝三日　　佛光寺

後志國島牧郡之内　運上屋元ヨリ東ノ方ユカエチシ迄

右地所支配被　仰付將又石狩國札幌空知両郡之内ヘモ便宜之土地開拓相成候様

尽力可致事

仝十日　　佐賀藩

千島國ノ内振別郡

右其藩ヘ支配被　仰付候條開拓守衛相兼盡力可致候事

千島國ノ内藁取郡　　高知藩

右同文

根室國花咲郡ノ内志古丹島　　増上寺

右其寺ヘ増支配被　仰付候事

贋金

三十　七月十五日配諸藩ヘ御下問書寫　日誌八十二ノ所出

貨幣偽造之儀ハ國家之大禁ニ候処近来驚擾之機ニ乗シ処々ニ贋鋳不少終ニ莫大之金高外国人之手ニ渡リ候ヨリ別紙之通申出候方人テ外国御交際盛ナル折柄国内ニ於テ大禁ヲ犯ス如此ノ夥敷ニ至ル内外人民之疾苦國辰寸之甚シキ是ヨリ大ナルハナシ就テハ右御処置振見込之処　御下問被　仰出候間明十六日中ニ差出可申事

別紙　覺書

日本通用金性合等混乱ニ付外國貿易ニ大害ヲ起シ候ニ付尤之廉々ヲ速ニ所置アラン為メ各國公使等輔相三條右大臣議定岩倉右兵衛督及ヒ外国知官事澤右エ門權佐閣下ト面語セシコトヲ要ス

第一

是迄　天皇政府或ハ徳川又ハ他ノ大名ニテ鋳造セシ一分銀并二分金ハ國内通用金ト為シ且

天皇政府ニテ相當ト思フ他ノ貨幣ヲ吹立追ヘ引換ル迄ハ右通用金無差支日本部内通用スヘキ旨ヲ
天皇政府ニテ證明スヘキヿ

第二

外國人又ハ日本人ヨリ日本貨幣ニテ政府ヘ納ムヘキ地税租税或ハ運上ヲ　天皇政府ニ於テ右ノ貨幣
ニテ請取ヘキ上日　天皇政府證明スヘキヿ
日本幣ノ貨仕方立ニ付　天皇政府ニテ施セシ処置振ヲ右面會ノ節閣下等ヨリ各國公使
委細承知致シ度事
右一件之辨解シ各國公使ヘ外國知官事及會計副知官事ニテ約セシ事既ニ三ヶ月餘越タ
レモ未タ其約ヲ果サヽリシ故ナリ
千八百六十九年八月十三日横濱ニ於テ

○七月廿二日解御建書　全八十二号

贋金之儀ニ付　給員數来十月中可申出候事

箱ノ館府

此度各國公使ヨリ申立之次第モ有之以来贋金通之儀更ニ御嚴禁被　仰出諸開港場外
國人所持之二分金至急取調正贋區別致シ贋金之分ハ追テ引換ヘ可被遣候ニ付右取調之儀北代
忠吉ヘ御委任其縣ヘ出張申付候間同人申合至急各國岡士ヘ掛合之上期限無遅滞夫々取糺
可申此段相達候事

新縣瀉

右同文　但北代忠吉ヲ虎太郎ニ作ル

北代　忠吉
北代房　虎太郎

贋金取調御用トシテ　箱館　新瀉　表出張申付候事

(三)

七月十四日 甲申 御沙汰書寫 仝八十二出

五島銑之丞

其方元知行所郷村先般本家福江藩知事ヘ可引渡旨被 仰出候ニ付而ハ村役人其外小民ニ至ル迄心得違無之様申諭可取計筈之処遂ニ民心沸騰ニ至リ候段全ク示方不行届ニ付此度可被 仰付候ニ候ヘ共既ニ引渡相済候後ニ付格別之譯ヲ以テ謹讀被 仰付候事

福江藩知事

其方儀先般末家五島銑之丞元知行郷村可請取旨被 仰出候付而ハ藩士共申付精〻鎮撫ヲ加ヘ可取計之処遂ニ民心沸騰ニ至リ候段全ク其方不行届ニ付此度ニ被 仰付候ニ候ヘ共格別之譯ヲ以テ差扣被 仰付候事

○二十日 己丑 御沙汰書 謹慎被 免候事

五島銑之丞

同 人ヘ

版籍返上之後地方采地ヲ賜蓋天下一人

兼テ歎願之趣無餘儀次第ニ被 思食格別之 思食ヲ以テ富江表ニ於テ高千石地方ヲ以テ被下置候就而者向後本末之大義ヲ不失様此度相心得可申事

福江藩知事

末家五島銑之丞兼而歎願之趣無餘義次第ニ被 聞食格別之 思食ヲ以テ富江表ニ於テ高千石地方ヲ以テ被下置候間引渡可申候就而ハ向後本末ノ大義ヲ不失様相心得可申事

各通

福江藩知事

五島銑之丞

有川村制札致破却候者并徒黨頭立候者末家立會取調之上処置方可伺出事

五島銑之丞ヘハ末家ヲ本家ニ作ル

○十八日丁寅 御沙汰書寫

織田信敏

先般 御沙汰之趣モ有之隠居被 仰付候処出格之 思食ヲ以テ其方儀再勤被

譴罰ヲ以隠居ノ者再勤蓋宇津宮候ト二人

仰付改テ被任知藩候間至仁之　御趣意ヒシ奉ヲ戴シ勵精竭力可尽職掌旨　御沙汰掌

織田壽重丸

父信敏儀今般再勤被　仰付候ニ付其方儀知藩事被免候以後嫡子ト可相心得

旨　御沙汰候事

三藩復版

献金

○七月廿二日　辟御沙汰書内

白石藩知事南部利恭

今般格別之御詮議ヲ以テ改テ盛岡ヘ復帰金七十万両献納被　仰付候事

盤城平藩知事酒井忠禄

○五月　甲辰　御達三陸両羽盤城按察府岩代国白石ヘ被置候旨被　仰出候事

右同文　但盛岡ヲ作ニ庄内

安藤從四位

○八月三日　壬寅　御達書　全八十六

今般格別之御詮議ヲ以テ盤城平ヘ復帰金七万両献納被　仰付候事

法律

○七月十一日　辛巳　御布告書　日誌八十二号

昨年来天下多事未タ一定之御法律相立サル処ヨリ自然不束ノ所業致シ候者往々有之今日ニ云ヘリ

其法ヲ正サレ候エハ罪責不可免素ヨリ法ハ枉ヘカラス候エハ其所業一己ノ私利私怨ニ渉ラスシテ騒

擾中無拠情毎見差迫リシヨリ法ヲ犯スニ立至リ候類ハ御寛典ニ被処候間能々事実取糺シ処

分可致事

○七月廿三日　御沙汰書　八十三号

岡山藩知事池田章政

末家池田大隅儀昨年来賊徒ニ與シ居今般悔悟自訴　公裁ヲ仰キ候段願出就テハ屹度被　仰付品

モ可有之処出格之寛典ヲ以テ御宥免被　仰付候間其藩ニ於テ扶助致シ候儀ハ可為勝手旨

御沙汰候事

○全廿七日　全

遠藤文七郎

仙臺

待詔院出仕申付置候処仙臺藩之儀乱後紛紜之事有之此節三陸盤城等巡察使被

差向置候程之事ニ付一先帰藩知事ヲ輔助シ藩政改正精々ニ尽ス可致事

但藩務相済候上ハ御用筋ニ有之ニ付其節可申出候事

目安箱

○目安箱之儀ハ下情ヲ可被通タメ御設ニ相成候処近来私之怨ヲ以人ヲ譏リ又ハ自分ニ重罪ヲ犯シ十カラ却テ無失ヲ申立又ハ上ノ御益筋ヲ名トシテ一己之利ヲ營ムノ類往々不少實ニ不埒ノ事ニ候就テハ自今何事ニヨラス實意ヲ以テノ申出候儀ハ居所姓名相認メ印形ヲ押シ可申其儀無之モノハ封之侭々焼捨ヘキモノ也

○七月二十九日 記仝 ハ十六ヒラ

刑部省

関宿

此度関宿藩士井口小十郎冨山匡之助共同藩杉山對軒ヲ及斬殺候始末其省裁断伺出之通於法ハ自尽々当然ニ候得共忽倉之後ヲ承ケ時勢不得止情実ヨリ差起候次第ニ付兼テ被仰出候儀モ有之通此度ハ出格之 恩食ヲ以テ死一等ヲ減シ可處寛典旨 徳川法候事

但後例ニハ不相成候事

○八月二十五日御布告之中 二通ヲ抄ス

菊徴号停止

社寺ニテ是迄菊御紋用ヒ来ル者不少候処今般御改正相成社ハ伊勢八幡上下加茂等寺ハ泉涌寺般舟院等之外ハ一切被差止候旨被 仰出候事

但格別由緒有之社寺ハ由緒書ヲ以テ可伺出候事

従前諸寺院ニ掲来有之候下馬下乗等之札向後取揚候様被 仰出候事

但格別由緒有之寺院ハ其所々之都府藩縣ニテ取調可伺出事

○九月四日御波浪書 各通 仁和寺門跡 大覚寺門跡 勸修寺門跡

国立国会図書館 タイトル『不懲迷語並外録』 請求記号 836-3
ガラス使用

僧官形役停止

從來其寺ニ於テ永　宣旨ヲ以テ僧官差免來候得共今般御一新ニ付向後被廢止候間此旨相達候事

但是迄許置候向ハ一代切可為其侭事

○九月十七日　九十九号　御沙汰書之内二ツ

東京中非人乞食共此度於本府夫々取調ヘ廢疾老幼之外壯健之者ハ四里ヘ引渡候ニ付藩縣ニテ請取候上ハ以後再度管轄外ヘ不立出様屹度處置可致事

盤城米藩知縣事安藤信勇

其藩俊復歸被　仰付候ニ付金七万両軌納可致旨兼テ　御沙汰ノ処更ニ御詮議ノ次第ニヨリ其藩管轄地盤城國盤城郡其外共高三万石ノ外迄高ノ分地所被召上軌納金ノ俊ハ被免候　但上地郷村ノ俊ハ追テ可相達候事

○今般神祇官中ニ諸陵寮被為置候事　仝日布告

○八月廿五日詔書寫　九十二号出

朕登祚以降海内多難億兆未夕綏寧セス加之今歳淫雨農ヲ害シ民將ニ生ヲ遂ル所ナカラントス朕深恤惕ス依而躬ラ節儉スル所有テ以テ救恤ニ充ントス主者施行セヨ

御布告書寫

詔書被　仰出候通兵馬之後庶民未夕安堵ニ至ラサル折柄當年諸道不作物價日増ニ騰貴無告之窮民ハ勿論一同之難渋差迫リ殊更東京ハ近来衰微之砌人口ハ從前之通莫大ニテ遊民最多ク漸次産業ニ基クヘキ御施法モ未夕行届カセラレサル中今日ノ姿ニ相成且又京都ニ於テハ即今御留守ト相成自然職業ヲ失ヒ困窮ニ立至リ候者モ不少全ク時勢之変遷無拠次第トハ申ナカラ必至難渋役是以テ深被為悩　宸襟格別之御節儉被遊既ニ餔饌供給ヲモ御減少被為在窮民御扶助被遊候就

八月廿八日　東京府　米三千石　京都府　四七百石

右窮民救助トシテ月々大藏省ヨリ相渡候條施行可致事

官祿減少

而ハ於諸官モ官祿之内ヲ以テ救恤ニ被充候樣願出候段神妙之儀ニ被　聞食候右ハ
御不本意ニ被為在候得共願之趣至誠毋具ニ通セサルモ御残念ニ被　思食當年
之処夫々減少返上之儀御存容相成兩京救荒ニ可完行旨　御沙汰候事
但救荒ハ一時之變ニ處スル事ニテ総而遊手徒食之者無之樣仕法立最
可為急務事

○八月九日御沙汰書寫　九十四号

佐賀藩知事鍋島直大

賞典ハ深重之　叡慮ニ以被　仰出候事ニテ願之趣不被及　御沙汰段先達テ
相違候得共猶又再往銀心願之旨趣全至誠之所致神妙之至被　思食候就而ハ
北海道開拓ハ　皇威隆替之所係方今至重ノ御急務ニ候処今年諸道不登庶民
凍餒之勢ニテ目下救荒之典モ難被為捨置旁以御用途必至御差迫リ之折柄不
被為得止乍御不本意當年限リ賞典半高返納被　聞食開拓御用途ニ可被為

賞祿半高返上

元旨被　仰出候事

○九月十二日御沙汰書　九十六号

福岡藩知事黒田長知

賞典全文小異如前条書被　聞食救荒ニ可被為充行旨被　仰出候事

○仝十四日御沙汰書

元十五万石豊前小倉

香春藩知事小笠原忠悦

居城地没收本祿減少不足藩祿藏前渡

其藩元管轄地豊前國企救郡日田縣管轄ニ被　仰付候就テハ本祿ノ内及減少
居候処今般御詮議ノ趣有之不高足三萬千九百八十一石二斗御藏前ニ以為藩
祿下賜候事

元六万千石石州濱田

鶴田藩知事松平武聰

此西藩長州ニ迫ラレ去丑年居ヲ去リタルニ

其藩元管轄地石見國那賀郡其外大森縣管轄ニ被　仰付候就テハ本祿ノ
内及減少居候処今般御詮議ノ趣有之不足高二万四千八百十石九斗二升三合
御藏米ヲ以テ為藩祿下賜候事

国立国会図書館　タイトル『不懲迷語並外録』　請求記号 836-3
ガラス使用

但美作國久米北條西郡其外共高三万六千百八十九石七升七合地所ノ儀ハ
是迄ノ通可為支配事

○九月十七日御沙汰書 九十九号

吹上藩知事有馬氏弘

其藩士鈴木鐘次外九人申合同藩辻元宗之進外二人ヲ殺害致シ其情状及越訴候段畢竟其方平生示方不行届ヨリ右ノ次第ニ立到リ不束ノ事ニ依之閉門被
仰付候事

○仝十五日 西一号

熊本藩知事細川韶邦

外国御交際ニ付テハ兼テ御布令ノ上日ニ有之処今般其藩兵卒谷留熊彦俊
於途中英国公使ヘ對シ及乱暴條候常々示方不行届之段不束之事ニ候依テ
謹慎被 仰付候事

新律撰定

十月七日御沙汰書 日誌西四号所出

刑部省

今般新律取調被 仰付候ニ付テハ前日集議院ヘ御下問ニ相成候通専ラ寛恕之 御趣意ニ原キ凡叛逆人命強盗放火等ヲ除之外可成丈流以下ニ處シ竟ニ刑無刑ニ期シ候様被遊度 聖旨ヲ奉體シ撰定可致上日 御沙汰候事

御布告書

西洋形船畳扁

西洋形風帆船蒸氣船自今百姓町人ニ至ル迄所持被差許候間製造又ハ買入ホ致度者ハ管轄府藩縣添書ヲ以テ東京外務省ヘ可願出事

但身元不慥之者共外国人剋合御国人所持之名ヲ貸シ與ヘ候様之悪弊無之様府藩縣ニ於テ篤ト吟味之上添書可致候事

仝十三日

水原兵隊

各通

栢崎縣

水原縣

其縣出張之兵隊為管轄 兵部省ヨリ軍監差向候條以来兵隊進退等之儀ハ申訣
取計可致事

宗嚴原藩知事

安徳陵

安徳帝御陵之儀取調被 仰付候間右 御陵ニ関係候事跡委詳取調可畢事

全十五日

上田藩
小諸藩
各通

信州騒動

其藩管轄信州地一所先頃土民蜂起其後及鎮静候ニ共其地方ハ従来湯騰之悪
風不少趣全下民疾苦之情毎貫徹不致ヨリ差起候後ニモ可有之候得共兎角
姦民之煽動ヨリ良民之大害ヲ引起候次第ニ有之不容易事ニ候屹度巨魁之者
取調處置方刑部省ニ可窺出事

全文 其藩作其縣

伊那縣

東京市中盗劫掠殺奪

全十七日

兵部省
東京府

近来市中盗賊夜ニ乗シ兵器ヲ以テ劫掠殺奪等之所業有之頗殊ニ輦轂下
ニ於テ右様ノ後有之候ハ以之外之事ニ候全府下取締不行局ヨリ差起リ候後ニ有之
候猶東京府兵部省申合セ取締方一際嚴重可致旨 御沙汰候事

○全十八日 御達書

百銭鋳増

今般新銅銭御鋳造ニ相成候得共差向キ北海道開拓為融通在来之當百銭御
鋳造増相成候条為得相違候事

○十月六日御沙汰書 全百五号

倉敷縣

金比羅領讃岐

讃岐國金比羅社領為鎮撫高知藩出張致シ居候処今般被解鎮撫候間
其縣ニ於テ可致管轄候事 ○高知藩鎮撫等免違アリ

越后按察使

今般水原縣知事当分越後国按察使兼帯被　仰付候ニ付取締向等臨機之指図
モ可有之候条此段相達リ事

十月廿二日

岩鼻縣

高崎騒動

高崎藩支配地上州群馬郡村々百姓共満勝ニ及其縣出役之者ヨリ不取敢説諭鎮撫為
致置候工共此上之模様ニ寄西部摺之程モ難測旨定テ疾苦之情状モ一ツ有之ニ見テ
人民御撫恤之　御旨趣ニ不相背様高崎藩申合有紀一ツ申出候事

高崎藩知事

其方支配地上州群馬郡村々百姓租税之事ニ付満勝之趣相聞エ篤ト取糺之儀ニ有之
別紙之通岩鼻縣　御沙汰ニ相成候間同縣ニ申合人民御撫恤之　御旨趣ニ不
相背様鎮撫可致候事

太政官日誌明治二年第百六号　自有廿五日至十一月十二日　略抄

○十月廿九日　御沙汰書写

高崎藩

高崎騒動結局

其藩支配所上州群馬郡四郷畑方永納并延口米等減納願之儀兼テ府藩縣一致之御制
度被為建候　御趣意ニ付速ニ御料所同様御改革可相成筈ト心得旁難渋申立之趣一
應尤之儀ニ相聞候得共地所之厚薄モ有之且従来之定額ヲ以テ既ニ昨年迄無滞相
納来候処當年ニ至リ岩鼻縣同様之納方ニ相成候様下民共強詐ニ及ヒ終ニ暴挙ナ
ニ立至リ候次第愚昧賤劣ト八乍申不来之至ニ候尤数百年来之税則等一時ニ相
改候ハ不容易儀ニテ他境ニモ差響日ヲ民心ニ関係シ大事作ニテ追々御処置之品モ
可有之候得共先ハ貫ニ随ヒ農業出精候様厚ク理解ニ及ヒ可申候尚當年不作
之向ハ其藩ニテ取調相當之納方申付候様可取計旨　御沙汰候事

丑心　藩

○仝十二月五日　御沙汰書写

国立国会図書館　タイトル『不懲迷語並外録』　請求記号 836-3
ガラス使用

其藩支配地勢州三重郡朝明郡員辨郡村々右姓蜂起庄屋始數十軒打毀候始末全
々疾苦之情實有之候ヨリ差起リ候儀ニハ可有之候得共斯々粗暴之擧動ニ及候ハ
往々姦猾之徒煽動之次第モ有之右樣悪風推移候テハ大ニ御政体ニ関係シ甚以不容
易事ニ候屹度巨魁之者取調處置方刑部省ハ可窺出候事

○仝七日甲戌御沙汰書寫　中御門留守長官

京都動搖

・今般　皇后宮啓行ニ付テハ京都府下人民致動搖候処格別尽力速ニ及鎮静候段神妙
被　思食依之目録之通下賜候事　綱一疋　末廣

長谷京都府知事

今般　仝文　格別尽力説諭方行届速ニ及鎮静候段神妙被　思食候此旨相達候事

○九日丙子仝上　内藤　藤翁

村上藩不協和

村上藩儀正邪混淆一藩不協和之趣相聞以之外之事ニ付尤知事幼弱之儀ニ付其方後
見被　仰付候間早々既藩兼テ被　仰出候　御趣意ヲ奉体シ屹度藩職ヲ尽シ候樣可致旨
御沙汰候事

○十二月三日庚子御沙汰書寫　日誌第百九号所出　村上藩

島居與一左門　水谷孫平治　近藤幸次郎　平井伴右左門　高橋佐治左門
右之者共和歌山藩ヘ御預被　仰付候間引渡可申事

和歌山藩

別紙名前之者　前五名アリ　其藩ヘ御預被　仰付候事
但受取方ハ村上藩ヘ打合可申事

十一月二日己巳御沙汰書寫　兵部省

大阪城其首管轄被　仰付候事
但外國人士官之者城内拝見願出候節ハ大阪府申談可取計事　○大坂府モ心得達アリ

東京府

戸籍改正之儀ニ付テハ[illegible]ヲ思食シ以テ先般其府ヘ御委任被　仰付市在戸籍取調之順序相立候得共武家地之儀ハ從来之體裁ニ因襲シ其管轄スル処不分明隨テ取締等モ精密難行届ヨリ自然無頼之徒潜伏往々押込強盗等之所業ヲ恣ニシ下民之困厄不一方候ニ付其府申立之通自今府下布在ハ勿論武家地共一切其府管轄ニ被　仰付候間戸籍一般之仕法取調府治之體裁相立候様可取計旨　御沙汰候事

○三日庚午御沙汰書寫

松平慶三郎

會津家名立

今般家名被立下華族之列ニ被置於陸奥國高三万石支配被　仰付候事

但郷村高帳之儀ハ追テ　御沙汰可有之候間受取候上藩名可申出事

飯野藩知事保科正益

松平慶三郎ヘ別紙之通被　仰付候間此段可相達事

○仝十日丁丑仝上

林藤助

請西家名立

今般家名被立下高三百石下賜候事

唐津藩知事小笠原長国

林藤助ヘ別紙之通被　仰付候間此旨可相達事

○十二日卯御達書

今般新化貝幣御鋳造ニ付藩々ニ於テ當今無用之銅製長大砲所持致シ候ハヽ相當之代價ヲ以テ御買上ケニ相成候間東京真崎鋳銭座ヘ申出早々廻シ方可取計尤便利之為吹崩シ相廻シ候トモ不苦候猶委細之儀ハ大蔵省ヘ可承合候事

仝第百七號　自十一月十三日　至二十四日　略抄

○十一月十三日庚辰御布告書

脱籍無産之輩先般復籍方被　仰出候処就中東京ハ從来人民輻輳之地ニシテ

国立国会図書館　タイトル『不懲迷語並外録』　請求記号 836-3
ガラス使用

東京無産者復籍引渡方

籍外之者来住無産遊惰之徒不少候間別シテ復籍方可取計之処其時々遠国ヨリ受取人差出候儀不都合之情実モ有之趣ヨリ自然　御旨趣難被行候テハ不相済候條業復籍人引渡候節ハ其者脱籍ノ始末并ニ生国親族等分明取調之上書取相添當人并家族共府藩縣送リヲ以テ引渡候間旅中入貴之儀ハ其道筋府藩縣ニテ相賄可申尤藩之儀ハ東京藩邸ヘ可引渡候事

但當人申立之件々一々本国ニ掛合候テハ時日遷延致スノミナラス其他不都合之廉モ有之ニ付當人申立之趣ニ基キ家族相添東京府ヨリ引渡シ候ニ付府藩縣ニ於テ深リ　御旨意ヲ奉シ引取ノ上夫々永久ノ生産ヲ授ケ候様可致萬一當人偽言ノ次第モ有之候ハヽ伺之上至當之處置可致事

東京戸籍地方取調方

全十五日壬午御布告書

今般東京府ニ於テ府治體裁夫々規則可相立被　仰出候ニ付テハ戸籍取調且又地方ニ致関係候儀ハ東京府ヨリ直ニ處置可致候條其旨相心得右等之儀ハ東京府ヨリ之指図可受事

全日御沙汰書

東京府

東京府兵

其府取締筋ニ付兵備無之テハ不相済儀候得共府兵取立不容易儀ニ付当分之処兵部省ヨリ差送リ相成候諸藩兵士ヲ以テ府兵之姿ニ組立約束号令賞罰黜陟ニ至ル迄総テ其府ヘ御委任被　仰付候事

但重大之事件ハ可相伺且兵部省ヘモ可申達事

兵部省

東京府下取締筋ニ付兵備無之テハ不相済儀候得共府兵取立不容易儀ニ付当分之處東京府ヨリ兵士入用之見込其省ヘ申達次第諸藩兵士人撰致シ同府ヘ可差送其上ニテハ約束号令賞黜陟ニ至迄総テ同府ヘ御委任被　仰付候得共兼テ其省

京學

二於テ云可相心得置候事

但重大之儀處置致シ候節ハ東京府ヨリ一七其者ヘ可申達候事

十二月廿二日己丑御沙汰書

大學校

學校規則相立候迄京都學校取建之儀可見合事

間部松堂

西京出頭被禁候処被免候事

伊達宗敏

全廿四日辛卯全上

仙臺藩知事伊達宗基儀幼年二付其方ヘ後見被仰付候間政度藩職ヲ可尽ス

御沙汰候事

按察

按察使ヘ御沙汰書

一藩縣ノ情状ヲ審按シ民政ノ得失ヲ督察シ且時宜ニヨリ官吏ノ非違ヲ糺シ具状可

及奏聞事

一非常敬言戒ノ事アラハ管内藩兵ヲ以テ臨機ノ處置シ迅速兵部省ヘ可報知事

全第百八号 十一月廿九日丙申

太政官

昨日第十二字兵部省火アリ百官 天機ヲ伺フ

兵部省火

全第九号十二月三日庚子御沙汰書

領地奉還

元中大夫 近藤 用虎 足利 木久磨 元下大夫 秋月三郎 元上士 児島孫七郎

今般領地奉還之儀神妙ニ被 思食言上之通被 聞食候事

込高取上

三根山藩

其藩支配地今般土地替被 仰出候処更ニ御詮議之次第有之御差止相成込高之内五百石被 召上候間越後国蒲原郡平野并ニ下山村之内ニテ上地水原縣ヘ引渡可申事

越后按察使

十二月五日子寅 按察使ヘ 御沙汰書

民政ハ治国ノ大本至重之事トス御一新以来専ラ億兆其所ヲ得テ生業勉勵候様トノ

億兆不得其所下民不至安堵豈唯北越哉

御趣意之処越後全国之儀ハ去年兵馬之衢ト成リ加之地方官屢変換諸藩之情状

来タ區々モ有之哉ニ相聞ヘ彼是下民安堵ニ至ラス實ニ北方之動静ニ相係リ候儀

ニ付今般當分按察使兼務被 仰付候ニ付テハ藩縣之政績ヲ熟察シ 地方官ト

戮力協心 御趣意ヲ奉体シ専ラ布政施治ノ道ヲ尽ヘシ上下之情ヲ貫通セシム可

ク候事

右大臣

全七日辰 御沙汰書

鳥取藩

松平祐堂ヲ預替

松平容儀今般和歌山藩ヘ御預替被 仰付候間引渡可申事

和歌山藩

松平容保儀其藩ヘ御預替 仰付候事 但鳥取藩ハ早々受取可申事

越后郷兵居之金革北辰隊案散

其縣管轄之兵隊三十五歳以下之者兵部省ヘ引渡可申三十五歳以上之者ハ相応之手當差遣

シ帰籍可申付事 ○兵部ヘ管轄可致事トスル迄アリ

水原縣

兵部省

水原改兵

兵隊六小隊水原縣ヘ出張可申付事 ○松代大垣 各三小隊出兵

全百十号 十二月九日 御布告

去月廿九日酉ノ半刻 外宮末社遥拝所焼失延焼モ難計 御動座被為在戌ノ刻

鎮火直ニ 還幸ニ相成候旨言上有之依之明後十一日酉ノ刻於 庭上 御拝被

為在候事

外宮末社遥拝所火

○明後十一日 神宮 御拝ニ付自今晩刻到十二日朝 御神事候事

一皇輕服者僧尼参 朝可憚事 但政府出仕之輩ハ十日酉ノ刻迄ハ不及憚事

○去月廿九日　外宮末社遥拜所焼失之節　御塾坐被為在候ニ付明十一日罷　朝被
仰出候事
十二日配御沙汰
先年来　山陵修營中奔走尽力矢費不少依之金七千両下賜候事
戸　田宮内大丞

(三三)仙臺藩三好監物割腹始末届書　モ已太政日誌第百八十一月廿八日條所出

三好監物儀非命之死ヲ致候始末委細取調可申上旨被仰渡奉畏尤ニ申上候
右監物儀父祖ヨリ數代ノ間仕官不仕罷在候処監物ニ至リ小姓組ヨリ出身シ累年
勤勞ヲ以テ終ニ參政ニ被擢後一旦退隠候処一昨年徳川氏政權奉還之砌伊
達樂山儀陸奥守タル時上京被　仰付監物再ヒ參政トナリ庶務総括仕リ斷然勤
王之議論ヲ固執シ圖藩之方嚮一定ノタメ尽力仕居候内昨年正月ニ至リ　禁
内御警衛人數之内先手一大隊ヲ引率シ急速上京仕候様被申付則遂氣船ニテ
西上仕候處着岸前既ニ討會之　勅命下リ続テ奥羽鎮撫使御下向ニ付引率
之兵隊ヲ以海上御警衛可仕旨ニ付監物儀ハ右之次第報知之ヲ陸行兼程馳
下リ候処是ヨリ前家老坂英力ナル者從江戸帰藩　王政復古之儀ハ　朝廷ノ旨
ニ無之由虚誕之論喋々相唱候ニ付　主系ヨリ僻遠離隔ノ地固陋無識之藩士翕

然彼ノ説ヲ信シ一唱百和宇ヲ不可揺討會之事紛紜不次ニ立至候ヘトモ獨リ監物ハ弥
勤　王之大義ヲ唱ヘ百方説諭其言頗ル過激ニ渉ルヨリ讒毀四集致シ候ヘトモサシモ不
屈遂ニ討會之議ヲ次シ出兵之手配リ晝夜從事罷在鎮撫使御下向奉待候処三月中旬
ニ至リ總督府御三卿御着舩相成至急討會ノ出兵御督責ニ付益賊論沸騰シ御三卿御
陣営近傍ヘ放火可致ノ勢ニ指逼候程之処監物内外庶務多端之折柄賊謀捍禦之事ニ
於テ最尽力仕候然レトモ言聴カレス謀用ヒラレス竟ニ奸黨ノ讒陷ニ遭ヒ排斥セラレ候
其後國論益紊乱賊魁容保謝罪奥羽合從等之説起リ尋ヲ總督府參謀世良修藏殿ヲ暗殺
ニ及候ニ至リ監物國事ノ頓ニ不可救ヲ計リ他日ヲ待ニ不若ト次シ賊徒ノ逆焔ヲ避ケ米邑磐
井郡東山黄海村ト申所ニ退キ引籠罷在候内外ヨリハ白川磐城両道ノ官軍勇進内ニハ反正帰
順相唱候者陸續輩出候ニ付奸臣共監物ヲ畏憚シ而方讒搆遂ニ冤罪ニ陥レ八月ニ至リ奸臣中ヨリ
糺問之儀有之由ヲ以捕亡手差向候處監物七月中ヨリ國事憂慢病牀ニ罷在候ニ付道ニ上ル不能由
ヲ以一度辞之候得共終ニ不免ヲ知リ醍醐公御用人方ヘ一書相認其他藩中同志之輩ヘ寄
書ヲ造リ悴酉助俊治欣吾三人ヲ膝下ヘ召寄セ申候ハ我八十ニ垂タル老母アリナカラ被逮
捕ニ臨ミ一時ノ生ヲ偷ミ老母ニ繋獄之艱苦ヲ罹ケンヨリ迚モ難遁一命ニ候得ハ老母
ニ先立大義ヲ全フスルニ不若汝等我意ヲ可体由反覆遺訓夫々終焉之用意取急キ罷在仕
候内十四日ニ至リ又々捕亡手差向縱令途中ニ斃レ候共召連レ候様監察ヨリノ令ニ候間
早々上途可仕由申来候兼テ次心罷在候得者擧止自若母ニ對シ児死シテ忠義之鬼
トナリ國賊ヲ剪滅シ我君ヲシテ再度青天白日ヲ仰ガシメ度心得ニ御座候間親ニ先立
不孝之罪ヲ許シ賜リ度ト申候得ハ老母無憂色莞尓トシテ止月候ニ付監物大ニ歡喜母
ト訳シ又三人之悴共呼寄セ我縱人ニ就死共魂魄不滅此後三十日ニ不出國論反正ニ可及其折ハ
我兼々教戒スル所ニ從事シ尽カ不可惰由再三丁寧遺言シ沐浴正服シテ壁上ニ岳飛
文天祥謝枋得之画像ヲ掛焚香再拜家臣小寺正兵衛ナル者ヲ召シ出シ家事ヲ所分シ

国立国会図書館　タイトル『不懲迷語並外録』　請求記号 836-3
ガラス使用

遺物シ給ふ与シ此上若又家族ヲ召捕候様申来候ハヽ何ヲ潔ク自殺可致ト申置酒ヲ呼訳飲席上ニテ書画等ヲ相認夜ニ入家人ヲ退ケ立端坐自又氣未ダ絶セズ瞋目回顧シ絶命之詞數章ヲ訓吟シ究然絶息仕候于時八月十五日享年五十四翌朝捕七手死骸ヲ輿ニシ賊吏點検ノ後親戚ニ引渡シ殯事取行不苦由ニ付兼テ遺言スル呼ニ随ヒ陸中國磐井郡東山黄海村之内松柏山皇徳寺ニ帰葬尓後國論一變九月十日ニ至リ遠藤文七郎後藤孫平等出ヲ職ニ就キ蠻藩一定ス於是出格至仁思典ヲ以テ蒙リ候盛物就死ヨリ三十日遺言果メ不偽然ル被存候盛物伐次第焼夏遠家累新史書ニ渉リ古今ニ通シ膾炙不之然レ忠心操不変ニシテ人ノ下ニ居スルヲ恥議論他ニ譲ルヲ不肖故ヲ以テ其賊徒之忌嫌ヲ表シ終ニ不測之禍ニ罹リ天命ヲ全不仕候同人姓源諱八清房閑齋ト号候北段申上候

三好盛物事死ニ臨ミ仙臺ニアル嫡子清篤へ遺シ候歌

國の為妻子家身の百年心を絶て告けらせ雄の玄章

心ある人ヲ見セヤ先哭ル猶名増る寿ヲ心を

二つなき瑞しら武士のつらふる君を何船もし

汨羅なも清かるも死なねて心ゆ似手流る命ぞ

奥羽鎮撫使家来へノ遺書

一筆啓上仕候乍恐御呼様益御機嫌能被遊御座恐悦之至ト奉存候次貴所様御安泰奉敬賀候然者私儀モ在所東山黄海村引籠罷在候処勃勃王之志ヲ立候儀好賊共申立名捕之役人等厳敷嫌疑之至賊之手ニカヽリ候ヨリハ存ロ寝仕候悼五名次第両助俊治枚五四人男子共御座候所五郎ハ九京大夫手前ニ勤仕罷在候処外三人之内何様ニカ仕御呼様ニ奉歎願平日私之所存相継候様申置候間宣敷御取計被下度候臨死コヽロイソカシク略文略筆御海怒被下度候恐惶謹言

八月九日

三好　盛物

清房花押

奥田九衛門尉様

御同役中様

二百七十有餘老母有之行末之所如何ト千万是者氣ニカヽリ候間若哉三人之内罷出候ハヽ御尋被下度於泉下モ夫ノミ奉歎願候以上

十月廿八日　御沙汰書

仙臺藩士故三好監物

兼テ勤王之大義ヲ固守シ賊論沸騰中ニ特中シ反正之策議ヲ尽ヽシ候処好臺ニ被制壓竟ニ及屠腹殊ニ臨終之始末等逐一達叡聞其忠節深ク御悼惜被為在候依之為祭資金目録之通下賜候事

目録　金二百両

伊達仙臺藩知事

其藩士故三好監物儀別紙之通　御沙汰ニ相成候条於其藩モ手厚ク祭祀ヲ營ミ其忠節ヲ表旌候様可致事

三ヽ　太政官日誌明治二年第百十一号　自十二月十三日　至十五日　抄

○十二月十二日　天童藩届書寫

藩士吉田大八儀昨夏中官軍御出張之砌大舊身尽力仕候処為奸邪被陥入屠腹ニ及候事蹟并平常之志操等申上候様御達御座候ニ付尤ニ奉申上候

右大八儀昨辰正月藩主信敏ニ随ヒ上京仕居候処信敏天ノモ祖先勤王之遺志ヲ継キ奥羽鎮撫使先導可致上旨被仰付感泣拝命先ヲ大八ヲ名代トシ速ニ東下申付候ニ付日夜兼行帰国之上東西ニ奔走シ皇威貫徹候様身命ヲ不惜尽力仕居候処荘内之襲撃ニ六兼テ御届申上候通城郭悉ク焦土ト相成候得共尚鎮撫使及勤王諸藩之愛憐ヲ受ケ漸迴復ニ至リ候事ニ寅ニ同人之苦心尽力ニ御座候然ニ閏四月中仙米之反覆ヨリ奥羽之諸藩大半其欺罔ヲ受ケ奉抗衡王師ヨリ大八勤王之大義ヲ唱ヘ奔走尽力仕候ヲ惡ミ頻ニ探索召捕ント致シ候ニ付一先賊焔ヲ避ケ時ヲ待レト種々苦慮仕候得共

四方皆賊ニテ潜伏之地ナク間關中終ニ山形領沖ノ原ト申処ニテ同藩之兵卒ニ被捕押一旦米藩
ニ送リ其指揮ヲ以テ再山形ニ因セラレ其後本藩ヘ引渡シ揚リ屋入申付置候処嫌疑尚難
解六月十八日山形藩山領岸勘解由秋元鎮輔両人見届ケ總代トシテ罷越各藩次議
之趣ヲ以テ可處重刑旨申渡シ候ニ付大八乃チ沐浴シテ正服ヲ着シ酒ヲ乞テ快飲シ詩及
俳句ヲ賦シ且幼子一遺誡ヲ作リ後自ラ佩刀ヲ試ミ從容トシテ自尺々仕候時ニ年三十七歳
同人儀幼ヨリ國史ニ就リ平素綱紀之衰弛ヲ慨シ　皇威更張之説ヲ唱ヘ專ラ心ヲ鈐
鞴ニ潜メ旁ラ劔槍之術ニ通シ政事ニ參シテ四弊ヲ除キ文武ヲ興シ且廣ク天下之士
ニ接シ孜々トシテ國事ニ勤勞致シ候後ニ御座候此段奉申上候以上

天童公用人
高麗浩之進

十二月八日

辨官御役所

吉田大八絶命詩并俳句

衆口鑠金寶信哉郭為焦土屋為灰男兒宜識義不義腰下寶刀帯
冷來

○我ノミハ涼シク聞ヤ蟬ノ聲

天童藩士
吉田大八

御沙汰書寫

兼テ勤王之大義ヲ抱キ賊黨陸梁中ニ奔走シ反正歸順之説ヲ唱ヘ奮勵尺々力候処
衆賊之爲メニ制壓セラレ終ニ屠腹ニ及ヒ候段達　叡聞深ク御悼惜被為在候
依之爲祭資別紙目録之通下賜候事

目録金二百両

織田天童藩知事

其藩士吉田大八ヘ別紙之通　御沙汰相成候条於其藩モ厚祭祀ヲ營ミ其忠節
ヲ表旌シ候様可致事

○十五日壬子　御沙汰書

山口藩

大學

○今般其藩常備兵之内千五百人東京常備兵被　仰付候処於兵部省當時兵制御取調中ニ付追テ御達相成候迄其藩ニ可差置事

但シ於其藩是迄之規則費用等巨細以書面早々可申出事

○仝第百十二号十二月十七日甲寅御沙汰書

大學校

自今大學校ヲ大學ト改称開成所ヲ大學南校醫學校ヲ大學東校ト可称事

東京府

今般大學句讀所被止候ニ付テハ其府ニ於テ小學教育之道施行可致候事

但從来之句讀所其侭引移之儀ハ大學商議之上取扱可申事

○十二月十九日條云昨夜仇賀藩卒六人江藤中辨ヲ塗ニ要撃セントス中辨之ヲ拒キ傷ヲ被ル依テ左ノ御沙汰有之

江藤中辨

其方儀不慮之難ニ遇候段達　叡聞為養生科金百五十両下賜候事

己巳日誌第十二号抄十二月十九日

兵部省

今般京都兵部省被廃候事

但京都戍兵管轄之者取調可申出候事

○仝百十三号十二月十三日庚申

兵部卿嘉彰親王春来職ヲ辞ス再度於是又辞表ヲ奉ル依テ今日　御前ニ於テ志願之趣深ク神妙ニ被　思食候旨懇々　勅諭有之職務御免相成ル

三五 兵部卿宮上表寫

臣嘉彰拝手稽首謹而白　臣嘉彰少年菲才ニシテ兵部卿ノ大任ヲ蒙リ洪恩海嶽ノ如シ然ルニ右職掌ハ國内及ヒ海外諸番ノ膺懲ヲ掌リ四方賓貢ノ路ヲ開ク所ニシテ固ヨリ徳具文武才通古今老成ノ者ニ非ズンバ竊位ノ罪難遁而已ナラズ自然國體ヲ辱ムルナリ故ニ春来再ヒ辞職ヲ願ト雖モ允裁ヲ賜ラス却テ勉励奉職ス

可キノ嚴命ヲ蒙リ恐懼　天意ヲ遵奉シ今日マテ厚顏奉職スト雖原来學植
無キヨリ纖毫ノ裨益ヲ見ズ奉傷　聖上之明夙夜悚懼ス幸ニ今　朝廷海軍局ヲ
開キ航海ノ技ヲ諳セシム臣　嘉彰兵部卿ノ大任ヲ免サレ海軍ヲ脩業シ萬國ニ航
行彼我ノ事情ヲ察シ他日ノ報効ヲ圖ラン是臣ノ素志也且夫才德老成思慮
忠純ノ者ヲ撰擧之ニ命ズルニ卿ノ職ヲ以セバ必能綱紀ヲ立テ國威ヲ更張セシ願ハ臣
ノ微衷ヲ諒シ速ニ允裁ヲ賜ヒ此旨宜奏聞賴入候誠恐誠惶秘多者　謹言

十二月廿三日　辨官御中　　嘉彰

仝廿四日辨官御中　御沙汰書

正親町陸軍少將
五條陸軍少將
鷲尾陸軍少將
四條陸軍少將

三六　京都伏水十津川三所交代在勤被　仰付候事

大阪兵部省出張被　仰付候事

三六

京都府

故大村兵部大輔ヲ及狼藉候者共去ル廿日處刑之砌遽ニ從彈正臺差留候趣以之外
事ニ候速ニ可処刑法事

糺問之筋有之候ニ付至急東京へ可罷出事

各通

長谷京都府知事
松田京都府大參事
海江田彈正大忠
門脇彈正大忠
京都出張
彈正臺

故大村兵部大輔ヲ及狼藉候者共去ル廿日處刑之砌其臺ヨリ差留罷越候者至急東
京へ罷越可申事

三九　吉井從四位上表寫

国立国会図書館　タイトル『不懲迷語並外録』　請求記号 836-3
ガラス使用

臣信謹儀先般改テ藩知事ノ重任ヲ蒙リ罷在候得共 臣信謹徒ニ其重任ニ堪ザル
ノミナラズ實以非常ノ御時節柄奉恐入候ニ付藩知事職御免被 仰付被下度奉懇願
候右ニ付委細以別紙申上候間願之通 御沙汰被下置候様奉冀望候誠恐再拜

十二月 辨官御中

吉井從四位
信謹

別紙

方今内外御多事ノ折柄公費莫大ニシテ自ラ國用不給加之庶民泣号ノ聲達
九重無勿躰ニモ御減膳ノ旧典ヲ被為擧候ハ實以恐入候次第ニ奉存候斯非常ノ御
時節ニ當リテ臣信謹儀幼弱不才ノ身ヲ以テ重任ヲ蒙リ罷在候テハ一日モ不安儀
候間是迄管轄ノ士民弥以テ 朝廷御支配ニ奉願度尤候節ハ自然冗費少ニモ
罷成小有餘出来可申是レ以テ 主上御愛勞ノ万一ヲ奉安慰ニ色不足或ハ下民御救
助ノ緒餘ニモ充ラレ候ハヽ如何計難有奉存候去迚泛ヽ帰着モ無之願上候テハ却テ
奉恐入候間同國宮鼻縣ヘ總テ附属為仕勿論邑土モ其支配ニ入候得バ別段御手
數モ無之聊縣ノ兵備モ相之可申兼テ承聞仕候ニ縣ニモ更ニ兵隊多々テハ往々不
都合ノ儀モ有之趣別シテ人民慓悍ノ土俗差當リ御出費ニ及ハス且他縣ヘノ響
キニ至ラズ守衛ノ兵隊出来候ハヽ是又一挙両得ノ儀ト奉存候尤様被 仰付
候上ハ臣信謹尤不及勉業仕稍成業ノ後尚又相応ノ御奉公モ仕度右ハ既ニ養父
ヨモ申談候処是モ素願ノ由ニ付何卒此段御許容被下置候様俯伏奉懇禱候
以上

十二月 辨官御中

吉井從四位
信謹

国立国会図書館　タイトル『不懲迷語並外録』 請求記号 836-3
ガラス使用

仝百十四號抄 自十二月廿六日 至廿八日

十二月廿六日(三九)北條從五位上表 追録

臣氏恭謹而再願仕候嚮ニ國家之大基礎御下問之節ヶ不及 微臣儀モ御國是管見仕候処
專ラ萬國御交際之折柄ニ付方面ノ任ニ堪ヘ難キ列藩郡縣制ニ如クモノナシト庸劣ヲ顧ミ
ス其節目ヲ掲ケ言上仕候処公儀輿論ヲ被為尺ヘ三治一致之御制度ヲ以テ 微臣儀モ
知事被仰付難有仕合奉存候ヶ去 朝政更始名實並立之 御趣意ニ付不肖之私
御請難仕且因襲ニテ藩治罷在候得共微弱之兵備實以テ藩屏之名ニ北月キ候間御
預リ地之儀ハ最寄之縣ヘ相納メ知事御免被成下候様奉願候処重キ 勅旨ヲ
以テ奉命仕候様更ニ被 仰付深ク恐入一先御請仕歸藩之上尚更改革致シ候
得共前條之次第ニテ心志不安且方今之時勢空ク苦慮罷在候モ背本意候
間尚又奉仰 朝裁度東下歎願仕候何卒土地人民節目相立テ最寄ノ
縣ヘ相納候間 私儀知事御免被 仰付候様奉願候ヶ不肖勤學之上相應ノ御奉
公可相勤志願ニ御座候鄙意ノ儀篤ト御洞察宜御執奏伏而奉希上候誠恐謹言

十月 辨官御中 北條從五位

(罕)淺野從五位上表寫 追録

臣長厚七代前長賢宗家綱長四男ニテ宗家ヨリ舊幕府ヘ申建宗家領地米之内高
三万石配分所務諸侯之列ニ被差置候以来江戸住居罷在 長厚近年之時勢ニ付去ル文
久三年江戸住居引拂宗家領地之内安藝國高田郡大賀谷ヘ引取住居罷在申候処今
般諸侯之称御差止華族ト相唱候様被 仰出宗家ニ於テモ藩知事被 仰付候処長厚
右様宗家四所務米之内配分ヲ受候迄ニテ采邑等ハ寸地モ參之然ニ其儀華族ニ列居候儀
名實不相當如何ニモ難忍不本意至極之儀奉存候依之甚以奉恐入候儀ニハ候得共華
族ノ列ヲ退キ爵位奉返上度奉存候此段宗家ヘモ相賴置候間可奉願候右情實

深御垂憐被成下厚御評議早々御許容可被成下此段奉願候以上

明治二年十一月　辨官御中　從五位淺野長厚花押

淺野正二位上表寫　追祿

同姓從五位長厚家筋之儀ハ兼而御届仕候通　私四所務之内ヲ高三万石配分遣ヽ候迄ニテ
采地等ハ無之依テ其伏華族之列ニ加リ　朝班ヲ汚候儀ハ如何ニテ名實不相當不大ナ意
至極奉存候之華族ノ列ヲ辭シ口宣奉返上度尚私ヨリモ奉願上候様倚頼仕候旧来
領地無之新ニ支配被　仰付可被下地所モ無之ニ付往々　朝職奉勤之業難能シ然ルヲ
朝位依然頂戴罷在候儀ハ名分相立不申ニ付長厚願之通被　聞食候得ハ私厄
介ニ仕置申度奉存候間早々御許容被成下候様仕度此段奉願候以上

十一月　辨官御中　淺野正二位

四　御沙汰書寫

各通

一　橋從二位

田安從二位

版籍返上被　聞食別紙之通家祿下賜東京在住被
仰付候事

土口井吉井藩知事

皇國一途之御政治ヲ奉体シ知藩事辭表之趣神妙之至ニ被　思食候仍之
知藩事被免別紙之通家祿下賜東京在住被　仰付候事

北條狹山藩知事

先般版籍奉還被　聞食知藩事被　仰付候処辭表差出候得共不被及
御沙汰候ニ付　一旦歸藩々中示合　皇國一途同軌之御政體ヲ奉體シ重テ出京再応
辭退言上及ヒ候段神妙被　思食候依之知藩事被免別紙之通家祿下賜東京在住
被　仰付候事

從来支配正租雜税共現高十分之一為家禄下賜候事

各通　右四名

四三

今般家禄被相定候ニ付テハ相當之家令家扶家從以下召仕等残置其餘從来召抱置候士卒之儀ハ地方官貫属ニ被　仰付候間姓名并ニ是迄宛行候給禄等取調可申出候事

但家令以下残置候人員姓名モ可届出事

各通　右四名

吉井藩士族卒

狭山ハ藩士族卒

吉井狭山藩被廃候ニ付地方官貫属被　仰付候事

各通　一橋從二位

田安從二位

從来支配地當巳歳租税未納之分ハ地方官ニテ取立候上可相渡間取調可申出候事

四三

德川静岡藩知事

今般御詮議之筋ヲ以テ清水家名被立下候ニ付而脈之者相撰可申出事

浅野從五位

華族之列ヲ退キ位階返上宗家ニ合併致度願出之趣無餘儀次第被　聞食候

得共位階之儀ハ是迄通拝叙可致旨　御沙汰候事

○廣島知事、達方々

四四

増上寺

先般奉報　天恩度趣ニテ書籍献納并ニ献金致之奇特之事被　思食候

此旨相達候事

岩鼻縣

太宗良縣

今般吉井狭山藩被廢士族及卒其縣貫屬ニ被仰付候就テハ懇切取扱常々
文武ヲ研究シ御用ニ相立候樣可致旨　御沙汰候事

仝上

吉井狭山藩被廢候ニ付支配地其縣管轄被仰付候事
但從來吉井狭山藩中之人材ヲ撰ミ更ニ其縣官員ニ充テ士族并ニ卒之取締
可申付事

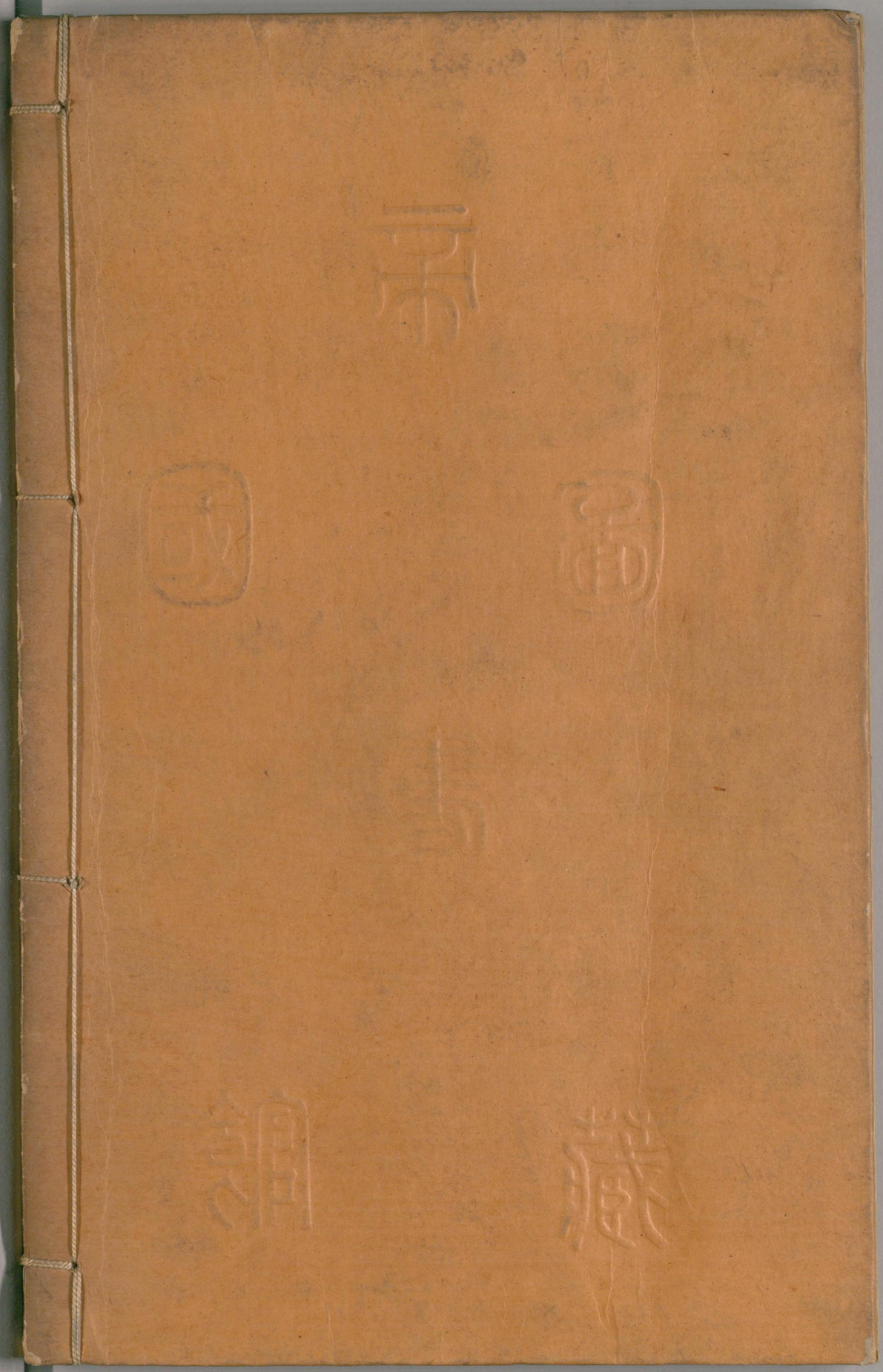
四五　御布告書

昨年兵馬紛擾之際御用途御多端ニ付楮幣御施行一旦之急被爲陵候得共右楮幣之
高ハ全ク國債ニ相成當年ヨリハ國債可相償筈之処豈料諸道不一貫奥羽諸道殆皆
無ニ屬シ當節歳入総計ニテ百萬石餘之御不足ニ相成候ニ付非常之節使被仰出
候外ハ無之場合ニ立至リ候間諸官省并府藩縣ニ於テモ猶更節儉ヲ主トシ可成
丈ケ冗費ヲ省キ御用途萬分之一ヲモ補益候樣篤ト相心得可申事

836
209
3

国立国会図書館　タイトル『不懲迷語並外録』　請求記号 836-3

ガラス使用



国立国会図書館　　タイトル『不懲迷語並外録』　請求記号 836-3

ガラス使用